アジリティわんこへの道

ajyujyu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アジリティわんこへの道

【Ｎコード】

Ｎ６８３２Ｏ

【作者名】

ａｊｙｕｊｙｕ

【あらすじ】

アジリティをするべくして、生まれたボーダーコリー「エリン」のアジリティスポーツドッグへの成長日記

里親～外の世界

　ぼくエリンって言うんだ。
ぼくって言うからには、もちろんオス。
ぼくは、しなやかでスマートな、短毛で、金色の目をもつきりりとしたママから生まれた。
７匹兄弟の３番目。
その中にパパにもママにも似てない、毛がくるくるのまいてる子が２匹いた。
中でも一番活発でやんちゃな２匹は、怪獣～と呼ばれ、２匹つるんで、いたずらざんまい、走り回っていた。
おかげで、ぼく達２匹はなかなか里親が決まらない。
　とうとう、どっちかを選ぶって里親がやってきた。
第一声は、女の子希望・・・。
「この子かわいいね～」と抱っこされ、選ばれた。
え？ぼく？
まぁ、いいや～。
ぼくを選んだ、あなた、大好きだよ～・・・。
そして、現在生後６０日、ママや兄弟と一緒に過ごす最後の夜となった。
　明日からは、未体験ゾーンへ突入するのだった。

いつものように、ふやけた暖かいご飯を兄弟を押しのけて争って食べた。
いつものように、２匹の怪獣の探検がはじまる。
ママと一緒に、ぼくが抱っこされた。
家の中から出た事がないぼく。
　あわただしく、ゴーゴーとうるさくて、動いてる。
安定できないぼく、大きな囲いの中で転げ回った。

ぼくは、必死で、プラスチックのつるつる滑る床に、爪を立てて、踏ん張っていた。
横にはママがいる。
いつもどこへ行っていたのか？
ぼくが一番最初に知ることができるんだ。

到着すると、そこは、広い広い砂場、芝生、雑草、石、いろんな匂い、
足元ばかり気になるぼく、すぐには歩きだせなかった。
一つ一つ気になることがありすぎて、目うつりする。
ママを見ると、広い広い砂場にある、いろんな障害物を楽しそうにこなしていた。
へぇ～・・・楽しそうだな～・・・
ぼくも、うれしくなってママと一緒に走り回ってみた。
気持ちばかり浮足立って、うまく体がついてこない。
数歩走っては、すっころんだ。
それでもなんだか、外の世界とっても楽しい。
　しっぽがぴーんと立ってて、大きな耳、足が短くて、妙～に胴が長くて、
こげ茶の毛が、僕の匂いを嗅ぎまくった。
どうしていいかわからなくて、固まってるぼく。
ぼくも、匂いを確認したかった。真似してみたら、
怖い目をして、ぼくを鼻で、突き飛ばして、
僕の上から睨みつけられた。
１００年はやいんだって。
のちに信頼のおけるあずみ姉たんになるのだ。
　お腹を出して、固まってるぼくの目の前で、
横っ跳びを連発して、
『ほら、固まってないで、起きて、遊びましょ～』って誘ってくれた。

ぼく、いつまでも落ち込んでる性格じゃないんだ～。
おぼつかない足で地面をけった。
　３０分くらい遊んだかな・・・ぼくは抱っこされると、
来た時と違う音と匂いのする小さなプラスチックに入れられて、それは動き出した。
爪を立てて、踏ん張ってたぼくだけど、
楽しい夢の中に落ちていった。
　どれくらいたっただろうか、
目がさめれば、用をもよをすのが習慣のぼく、
どうしよう～・・・だれか気付いて・・・
どこですればいいの？
かりかり、プラスチックをひっかいて、出ることを試みた。
が、何も変わらなかった。
うるさいエンジン音よりもさらに大きな声で、吠えてみた。
『ここから出して。』
聞こえてないのか、気付いてないのか？
もう限界だ・・・。ぼくはもう甲高い叫び声になっていた。
『もう出ちゃうよ・・・いいの？』
帰ってきた言葉は、「うるさいよ・・・もうちょとだから」
我慢できるはずもなく、プラスチックの中でうんちまみれになっていた。
やっと止まったエンジン音
扉が開くと、いちもくさんに外に飛び出した。
怒られることもなく、僕は体をきれいに吹いてもらい、きれいになったプラスチックに入れられた。
　休憩に立ち寄ったサービスエリア
首輪ってのをつけて、ぼくは、外に出た。
初めての匂い、たくさんの車、人間、硬い石の塊（コンクリート）ぼくは、完全に固まっていた。
すると、あずみ姉たんが、そっと僕の顔をなめて、

『大丈夫、こっちだよ、ついといで』
ぼくは、おぼつかない足で、必死に歩いた。
草むらに到着すると、
ぼくは、とにかく、あずみ姉たんの真似をすることにした。
あずみ姉たんの匂いを嗅いでると、同じように匂いを確認、
ちっこをしたら、同じようにちっこをした。
穴を掘ったら、同じように穴を掘り、
草むらに入って見えなくなったら、同じように草むらに顔を突っ込んだ。
一通りすることが終わると、また姉たんの横っ跳びがはじまり、
一緒に遊んだ。
　こんなことを何回か繰り返し、やっとぼくがこれから暮らす家に到着した。

「今日は疲れてるから、もう寝なさい」って広いお家に入った。
そこには、もう2匹、尻尾はないけど、胴が長くて、耳がでっかく、足の短いのがいた。
2匹はぼくの匂いを嗅ぎまくり、『しんまいかい、この家の子になるの？よろしくね』と
言われた。
上は9歳のどうどうとした風格の長老ココ、あずみ姉たんの母ぽっきぃ6歳。
ぼくの大きさはまだコーギー達の半分くらい。
ぼくは、まもなく、深い眠りに落ちた。

　朝ご飯はみんな一緒に一匹づつお皿がある。ぼくのもあった。
昨日から何も食べてないぼくは、腹ペコ。
いちもくさんに食べきり、まだ食べてる姉たんの所へ、ちょっと味見させてもらいに行ったら
歯をむき出して恐ろしい形相で唸る姉たんに、ぼくは飛び跳ねてひ

っくり返った。
他のお皿に顔を突っ込んで食べてはいけないと学習した瞬間だった。

　トイレも姉たんの真似をした。
それでもうまく出来ないと、長老がぼくの目の前でこうやるのよって、見本を見せてくれた。
だから、朝のトイレタイムは４匹一緒にトイレの周りをうろうろ、混雑、混雑、で、ぼくはいい場所を発見した。
パパさんの読んでる新聞さ～・・・ぼく、ここでもしたことあるよ、とっても褒められた。
だから、パパさんにも褒めてもらいたくて、目の前でほら～って、して見せた。
途端に、「あぁ～」「こら～」って叫び声・・どうやら、まずかったらしい。

食後の水のみタイムもどうやら、順番が決まってるらしく、
長老、次は母、そして、姉たん・・・オレも喉がからっからだ。
待ちきれなくて、姉たんの飲んでる横に口を突っ込んだ。
あれ？怒らないんだ～・・・
水だと、長老も母も一緒に飲むのはＯＫだった。

僕と遊んでくれるのは、もっぱら、姉たんだ。
ロープを持ってきて、ぼくを誘い、口にくわえると、少し力を加減してひっぱてくれる。
なかなかボールキャッチできないぼくに、ママさんはパンから始め少しずつキャッチできるようになると、
だんだん小さくて、硬いものに、そして、とうとうボールをキャッチできるようになった。
転がるボールを取りに行き、持ってくるって事も、
長老や姉たんがやってる事を真似して覚えたぼく。

見た目やさしいお顔のぼくは、誰に会っても、かわいい女の子～と言われ、なでられた。
おかげで、「かわいい～」と言われると、口がゆるみっぱなしのぼく。
４か月にもなると、足も伸びて、長老達をまたげるようになってきたぼく。
態度もだんだんＬに、大胆になり、パワフルなぼくと遊んでくれるのは姉たんだけになった。
さすがに、ご飯は他の皿には手は出さない。
が、水は、大きな口になった僕が顔を突っ込むと、みんな譲ってくれる。
なので、おかまいなし、遠慮なしで水を飲むのさ。
　ある日、気付いた事がある。
長老や、母や姉たんはママさんのベッドで一緒に寝ることを許されてる。
ぼくは、乗ることさえ許されない。なんで・・・かな？
ぼく、早くママさんと一緒にベッドで寝たいなぁ～・・・。

予防接種もわけもわからず、あっという間に終了し、
庭から、グランドや姉たんの、練習に同行するようになったぼく。
ぼくのトレーニングも始まった。

公園デビュ～（前書き）

公園デビュ~

一緒に連れて行ってもらった姉たんのアジリティ練習グランド
そこは、と～っても広くて、小さい頃にママが楽しく走っていたのと同じ、ハードルや登りものやシーソー、トンネルが、あちこちに散らばっていた。
ぼくは、と～っても楽しくなっちゃって、広いグランド隅からすみまで、走り回った。
「エリン、おいで～」
あっ、ママさんが呼んでる～。
はいは～い・・・と最初はすなおにママさんのもとへ戻っていたぼくだった。
　でも、ある時、ちょっとまって～っていう気持ちがぼくにわいてきた。
今、ここの匂いをチェックしてるんだ～。
もっと走り回って遊びたいんだ～。
とかってね。
でもおやつ～とか、ぼ～る～も手伝って、見るとママさんの元へもどっていた。
ある日、もう戻ってくるから・・・と安心したママさんは、
公園っていう所へ連れて行ってくれた。
そう、公園デビュ~ さぁ・・・

いつもと違う公園の匂い、他の犬や猫の匂い、人間の匂い、おかしの匂い、からすの匂い
いたち、うさぎ、ねずみ、もぐら・・。きりがない・・
楽しいったらありゃしない、興味もつきない。
呼ばれたって、それどころじゃないんだ～
ウサギのうんちを見つけた。ご飯に似てるな～・・・食べれるのか

な？
食べてみるか？ちょっと味見してみる、なかなか、ぱくっって食べる勇気ない。
口に入れては、出してはを繰り返し、とうとう、一粒ごくっって飲み込んだ。
ん～・・いけるかも・・・
と、そのとたん、ママに首根っこをつかまれて、「ダメ」って怒られた。
呼んだら来ないと・・とも・・・ね。
またまた、探検してると、土がもこもこって動いたように見えた。
しばらく匂いを嗅いでみてると、土の下から、かすかに、ごそごそと音が聞こえる。
耳を傾けよ～く聞いてみた。何かいる！！
そうなりゃ、穴掘り開始・・・口も目も耳も手も足もお腹も胸も前進泥だらけになって必死に掘った。
何かいたことは確かだ。だって匂いがすっごいするんだもの・・
またまた、ママさんに「こらっ」って怒られた。
　落ちてるゴルフボールを見つけた。
思わず、持って姉たんやママさんに見せつけに行った。
ママさんや姉たんに「ちょうだい」っていわれたけど、
『やだよ～、だってぼくが見つけたんだもの』
公園を逃げ回った。皆僕を追いかけてくる～わ～い、おもしれぇ～。

トレーニング

８か月になったぼく、まだな～んにもできない。
姉たんの通ってるアジリティのレッスンに一緒に同行した。
それは遠い遠い、車ではるばる８時間、日本を横断した反対側
そして、ぼくのママの居る所。
　ママに会いたかった。
ママに近づくと、睨まれて、唸られた。
『えっ？なんで・・ママでしょ、
匂いは確かにママなのに・・・もう忘れちゃったの？』
ママに触ることもできなかった。
『ぼくが、大きくなったから、わからなかったのかな？』
なんだか寂しかった。
姉たんがハードルやトンネル、スラロームや歩道橋をママさんの指示でどんどんこなしていく。とってもと～っても楽しそうだ・・
ぼくは、姉たんにくぎ付けだった。
　いよいよ、ぼくの番がやってきた。
先生が・・「リードを外せますか？」「呼んだら戻ってきますか？」
ママさん・・「家では来るけど、ここではどうかしら？？？」
そんな会話が聞こえた次の瞬間「カチッ」ってリードが外された。
わ～い、姉たんがやってたのやりたかったんだ～・・
ぼくは、トンネルやハードルの周りを飛び跳ねて走り回った。
ママさんが呼んだのも聞こえなかった。
先生・・「アジリティは犬を放してトレーニングするものです。呼んで戻ってこないとトレーニングできませんよ。」
「外ではロングリードは必ずつけて、トレーニングしてください。」
この会話の後、家に帰ってから、グランドでも公園でもぼくには、リードがくっついていた。
最初、ママさんが呼ぶと、ちょっと待ってって前みたいに思ってい

た。
でも、思い出して戻ると、と～っても誉めてもらえて、おやつももらえて、ボールで遊んでもらえた。
ぼく、だんだん、戻ることが楽しくなってきた。
待つことや、ハウスも覚えたよ。
ハウスなんて、おやつの為なら、すぐに、ぼくは飛びこむのさ。
なんたって、育ち盛り、いつでもお腹がすいてるんだもの・・・。

トンネルに挑戦

８か月になったぼくは、日頃お仕事に出かけるママさんとパパさんがいない間、
ハウスで寝てるか、敷物をかじってるかしてた。
あんまり、敷物を粉砕して食べてしまうぼくに、ママさんはもう敷物を入れてくれなくなった。
もちろん、ハウスからの脱走もくわだてたさ。
屋根をぶっ壊して、長老や、姉たんがハウスにいる間に、ちゃ～っかり、ママのベッドにもぐりこんだ。ママさんの匂い、ふわふわした布団、ぼくは、ねっ転がって、飛び跳ねて、
ママが帰ってくるまで寝て、フリータイムを満喫したのさ。
大満足のぼくは、ママさんが帰ってくると、尻尾をめいいっぱいふりふりして、お出迎えした。ママさんの目は大きくくりんくりんになって、ぼくを見つめた。
でも、怒らなかった。
次の日、ぼくは脱出を試みたけど、もう二度と開けることはできなかった。
　呼び戻しがだいぶできるようになってきたぼく。
姉たんの練習グランドでは、そろそろ始めましょうか～ってぼくもいっしょにトレーニングが始まった。
　まずは、トンネル。
黄色い色で、ひだひだで、長くて、丸い穴が開いている。
穴をのぞいてみたけど、向こう側は見えない。
ママさんは、それを指さして、ハウスって言った。
『ハウスって、ぼくの知ってるハウスと違う。でも入ったらおやつくれるかな？』
『でも怖い、中はどうなってるんだろう？』興味はあるけど、用心深いぼく・・

なかなか入れないぼくに、姉たんが、何回もぼくの前で、入口から入り、出口から出てきたり、逆回りしたり、横っ跳びをして、ぼくを誘ったり、ぼくは、いつの間にかつられて
姉たんを追いかけて、ハウスに飛びこんでいた。
『あれ？な～んだ、入ったら出られるんだ。中はな～んにも怖くないや』
ぼくがハウスっていうトンネルをマスターした瞬間だった。

ハードルに挑戦

ハードルに挑戦
おりこうさんになってきたぼく、
ちょっとづつ家でのフリータイムの時間も長くなってきた。
そこで、いつも気になっていた、電気コード。
ママが毎日触ってる。
にょろにょろ長いコードにぼくは、タックルしてみた。
ちょっとうにょって動いた。
鼻で突っついてみた。ちょっと動くけど、反応がない。
口でくわえて、振り回してみた。
すると、長老とぽっき～と姉たんがけっそうを変えて、唸り声をあげ、
周りを取り囲まれた。
『なっ、なんだよ～遊んでただけじゃないか。』
なんだか、にょろにょろ長い紐で遊んではいけないようだ。
ぼくは、その場から離れた。みんな元のお布団やハウスに戻っていった。
と何をするにも、この家の決まりを教えてくれる先輩たちだった。
　グランドでは、トンネルを覚えたぼくは、トンネルを見つけると、かってに何回も入って遊んでいたけど、ママさんが知らん顔してるんだ～。
『なんで、誉めてくれないの？ぼく上手でしょう～？ほらっ、見て見て～』どどどどど～。
だだだだ～。『反対だってできるよ～』
ママさん、楽しそうな顔してないな～、あ～あって肩を落としてる。
ある時、ママがハウスって言って、トンネルを指さしたんだ。
ぼくは、できるよ見てて～って勢いよくトンネルに入った。ママさんがと～っても喜んでボールで遊んでくれた。

ママさんの反応を見てると、ママさんがハウスって言った時にトンネルに入ると、ママさんも喜ぶし、ぼくも、うれしくて、楽しかった。

「そろそろ低いの飛んでみる？」ってママさんが言った。

すると、三角の木の板と長い棒が出てきて、ぼくはその前につれていかれた。

見たことあるよ、これ、ママや姉たんが楽しそうに飛んでたやつだ。

最初は、棒は草に半分埋もれて、地面に置かれた。

そして、「エリン、ボール取って」ってボールは棒の向こう側へ転がった。

ぼくは、ボールを取って走り回った。

次は棒がぼくの膝くらいの高さになった。ボールは棒の向こう側に転がる。

『くぐるには、ちょっと低いな～』と思ったぼくは、棒をひょういとまたいでボールを取りに行った。ママさんはとっても喜んでいた。

戻ると、棒はぼくの胸くらいの高さになった。

ボールが転がる・・・

そんな高さ飛んだことないぼく、棒の下をくぐって、ボールをゲットした。

なんどやっても飛ばないぼくに、ママさんは、「あっ！そうだ」っていうと

くぐれないように、もう一本間に棒が追加されて、2本並んだ。

もう下からはくぐれない。上も無理っぽい。じゃ・・・僕はひらめいた。

僕って天ちゃい。

ぼくは、棒と棒の間をシュパッっと通ったのさ。

ママさんもびっくりのスーパーウルトラジャンプだったのさ。

でもね、ママさんはやるな～って言ってくれたよ。

ママさんがハードルに細工をしたんんだ。

ハードルの棒を斜めにクロスしたのさ。

ぼく、考えたよ。すっごく考えたんだ。どこからくぐろうかってね。
これはゲームだ。これを攻略しないと、男がすたる。
すると、ママさんが僕をよんだんだ。とっても優しい声でね「エリ〜ン」
ボールでいっぱい遊んでくれた。そして、もうボールしか見えなくなってる僕は、
ふわっっと上に上がったボールを追いかけて、
胸より高いハードルの棒を飛び越えてたのさ。
ママさんは、飛び跳ねて喜んで、僕をいっぱい、いっぱい誉めてくれた。
僕は、お銚子ものだから、何回も棒の上を飛んでママと遊んだ。
棒の上を飛ぶことが楽しくなったんだ。

脱走

僕って、とってもいい子だって思うでしょ。
でもね、ママや兄弟と離れて一人ママさんの家に来た時は、
と～っても寂しくて、『きゅ～ん、きゅ～ん、ピ～ピ～』泣いてた。
寂しいんだって、思ったママさんは、長老ココたんを僕のハウスに入れてくれた。
ちょっと甘えてみたら、長老はとってもとっても迷惑って顔して、
睨まれた。
怖いおばさんだ・・・って思ったさ。
そして、ママさんが僕の為に入れてあったふわふわの敷物の上に寝ちゃったのさ。
僕は冷たい床の上で、また泣いた。
迷惑顔の長老の怒りが爆発して、僕はかまれはしなかったけど、思いっきり怖い思いをした。
僕は泣こうとすると、長老が怒り、『ガウガウっ』て言われた。
僕は、寂しいって、泣くのをあきらめた。そう、我慢することを覚えたんだ。
それでも、だ～れもいない時、長老がかまってくれるのがうれしかった。
いつの間にか、長老がいると安心して、お腹を出して、足をかぱ～って広げて、
無防備に臍天で寝る僕がそこにいた。
僕がハウスにも慣れたころ、長老は自分のハウスに戻り、のんびりしたもとの生活を過ごすようになった。
この頃から、僕はフリータイムが少なかった。
でも長老や、姉たん達は、ほとんどフリーで家の中で過ごしていた。
なんで、僕は出してもらえないんだろう～。僕も遊びたい。姉たん・・遊ぼう～。

ここから出して・・・。出たいんだ～・・・。
って思いがだんだん、強くなってきた僕。
とうとう、『ギャンギャン、ピ~ ~ ピ~ ~』甲高い耳をツンザクような耳障りな声
周りはそうとう、いらいらするらしく、長老も姉たんもハウスに避難して、うずくまった。
ぽっき～は動けなくなって、震えている。
ぽっき～は小さい時に、ボーダーコリーに追い詰められて、怖い思いをしている。
ママさんが、しばらくは、我慢していたけど、おさまらない僕に、限界が・・・
突然ハウスのドアが開いた。興奮して吠えまくってる僕に、いきなり襲いかかってきた。
ハウスの中に入ってくると、僕の口をぐっとふさぎ、押さえ込まれた。
必死に抵抗した僕、なんて力なんだ・・・もがいても、もがいても、動けなかった。
しばらくして、疲れた僕は、力を抜いた。
ママさんは、そっと力を抜いて、僕を解放すると、
「わんわん、吠えちゃだめよ・・・」って僕をなでてくれた。
ママがハウスから出ると、やっぱり、ハウスから出してもらえないのは同じだった。
納得いかない僕は、すぐに、『ギャンギャンギャン』
こんどは、ママがすかさず、怖い顔で、「いけない」といいながら、ハウスに入ってきた。あっ、また、捕まると思った僕はハウスの中で逃げまくった。
それでも、捕まって、押さえこまれた。
僕の抵抗は、さっきより、すさまじかった。ママもこれでもかって押さえこむ。
やっと力を抜いた僕に、人睨みして、ママはハウスから出て行った。

今日はおとなしくしとくなんてことはない。
僕はあきらめが悪いんだ。
翌日、またまた、僕だけがハウスに入れられた。
これが、ハウスに入らなきゃいいのに、おやつの為なら、ハウスにすかさず入る僕。
なんで、出して・・・って、『ギャンギャンギャン』
すると、「いけない」ってママの声
とたんに、長老を筆頭に、３匹、ハウスの周りに集結し、僕をにらみつけた。
ぽっき～は僕がハウスにいるので、ここぞとばかりに、参加して、態度はでかい。
さすがの僕も喧嘩はしたくないので、あきらめた。
こんなことが続き、僕はある日・・・ない頭を使って、必死に考えた。
ここの扉がいつも開くんだ。そして、僕は出られる。
扉を開けるときママは、いつもこのあたりを触ってる。
僕は、大きく口を開けると、扉を加え、なんとか開かないか、上に下に横にガチャガチャいろいろやってみた。
すると、あら？開いた。やった～。
僕は小躍りして、フリータイムを満喫した。
もちろん、こんなことは、すぐにママにばれ、鍵をかけられる羽目になったが。
頑張れば、できないことはないと、学習した僕だったのだ。
でもね、これ、僕たまにだけど、開けられるんだ～。
ママには内緒なんだ。

初めての競技会

ハードルも飛ぶ事を学んだ僕は、
そう、ハードルと、トンネルが出来れば、競技会のビギナークラス
オープン競技に出場できるのだ。
何事も経験が必要～と、社会勉強に、競技会場には時々参加してい
た僕。

始めは、走ってる犬達にも興味はなく、
周りを歩いてる犬や・・・
声をかけてて、なでなでしてくれる人間・・
には興味深々で、甘えまくっていた僕。

そんな僕に、とうとう、競技に出場する日がやってきた。

この日はとっても晴れていて、リンクの周りを歩いたもののの
やっぱり、犬見つけては、
やぁ・・・君は走るの？
やぁ・・・・もう走ったの？
としっぽを精一杯ふって、あいさつをしてたのさ。

なんだか、皆、心臓の音がばくばく大きく聞こえるし、
息づかいも荒く、はぁはぁ言ってる。
なんだか皆楽しそうだし、興奮してるし・・・
僕もテンションあがるな～・・・

５番前くらいになると、名前が呼ばれ、順番を付く。
僕の前の犬も後ろの犬も、走ろうとしている犬も
やるぞ。。走るぞ・・・走りてぇ～って気持ちも高揚してるのが伝

わってくる。

僕も・・・ハンドラーを見てわ・・・
ねぇ、僕も走るの？
僕の番はまだ？
前のハンドラーがスタートの指示が聞こえる毎に
一緒にスタートを切っては、リードの長さが短くて、跳ね返っていた僕。

僕、考えたんだ、そうだ、このリードが邪魔なんだな・・・
じゃ、噛み切っちゃえ・・・とギリギリと噛み切ろうと試みてると・・・
ママに見つかって、叱られてしまう。

じゃ、いつ、僕の番なの？って、ギャンギャン吠えたり、
ちょっと、小突いてみたり・・・ちみってかじってみたり。
とにかく、落ち着かない僕。

いよいよ、ど～ぞ・・って声がかかって、
ママとハードルの前へ進みでた。
あぁ～やっと僕の番だね・・
僕は、ちゃ～んとハードルの前で、伏せして、スタンバイＯＫ
とママを見上げると、
ママの顔は青白く、笑顔が消えて、足も手も小刻みに震えてる
こんなママを見たことがなかった。
え？どうしたの？ママ？
怖いの？何？
指示をちゃんと聞こうと耳を澄ましてみた。
ママの心臓が爆発しそうなほど、ドッキドッキドクドクって
早く、不規則に大きく聞こえた。

気の小さいワンコだったら、逃げ出したいに違いない。
でも、僕は走りたい方強かった。
やるぞ～、さぁ・・・いつでもいいよ～。

ママのホップの声を聞いて、僕は、目の前のハードルを飛んで行った。
途中からは、もうママの声は聞こえなかった。
とにかく、目の前に見えるハードルとトンネルに突っ込んでいっただけ・・・
最後のバーを飛ぶと、
周りで見ていた人達からの「ワァ～、おりこう～、おめでとう～」といっぱいいっぱい褒めてもらい、僕はとっても嬉しかった。
やったね・・・ママ・・・僕ってとってもおりこうでしょ～。
ママの顔も笑ってた。

競技会って楽しいな～・・・また行こうね・・・ママ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6832o/

アジリティわんこへの道

2011年10月8日05時18分発行